



## 会長および評議員選挙公示

選挙管理委員長 川窪 伸光

2014年12月末をもって、2013－2014年度の役員が任期満了となります。これにともない、次期会長および評議員の選挙を、学会会則12条および役員等の選出についての細則に従い、下記の通り行います。今回、会長はじめ評議員会の意向により、これまでよりも少し早めに選挙を行うことになりました。これに伴い、公示から投票までがやや短い期間となります点をご了解ください。

この選挙で選出される会長および評議員には、学会運営や活動の舵取りをしていただくこととなります。大切な選挙ですので、学会員の権利である一票をぜひ投じて頂きますよう、会員のみなさまにお願いいたします。投票の締め切りは2014年7月20日（日）です。

なお、会則第13条第3項で定められているように、役員には在任期間に関する制限があります。今回の選挙では、以下の方に評議員の被選挙権がありません。投票用紙に記名されても無効になりますのでご注意ください。

評議員の被選挙権なし（五十音順）：秋山 弘之，大村 嘉人，副島 顕子，仲田 崇志，西田 佐知子，藤井 伸二，村上 哲明

また、今回役員等の選出についての細則の第2条にもとづき、評議員会から会長候補者として以下の3名の方が推薦されています（3ページ）。なお、評議員会推薦の会長候補者以外の被選挙権をもつ会員に投票されてもかまいません。

評議員会推薦の会長候補者（五十音順）：角野 康郎，高宮 正之，西田 治文

### 選挙実施細目

1. 投票締切：2014年7月20日（日）（当日消印のものまで有効）
2. 投票用紙：投票には、ニュースレター本号に同封されている会長選挙投票用紙（黄色）と評議員選挙投票用紙（青色）を使用してください。それ以外の用紙を用いた場合、無効となります。
3. 記入方法：ニュースレター本号の選挙人名簿をご覧になり、会長選挙投票用紙（黄色）に会長候補者1名を、評議員選挙投票用紙（青色）に評議員候補者8名以内をそれぞれ記入してください。同姓あるいはよく似た名前の会員がおられます。投票に当たっては選挙人名簿を参照の上、氏名を略さずに記入してください。規定数を超えて候補者名を書かれた場合は、その票自体が無効となります。また、会員以外の候補者名を書かれた場合は、会員以外の部分のみが無効となります。
4. 投票用紙の郵送：記入後、投票用紙を二つに折り、同封の返送用封筒に入れて郵送してください。封筒には、ご自分の住所と氏名を必ず記入してください。封筒が同封されていないか、あるいは紛失した場合には、「会長・評議員選挙投票用紙在中」と朱書きした任意の封筒で、下記の投票用紙送付先まで郵送してください。その場合、切手代はご負担ください。なお、投票用紙の再発行はいたしません。
5. 開票：2014年7月28日（月）に票を開票します。開票場所は岐阜大学を予定しています。会員2名以上の立ち会いのもとに開票します。会員は開票に立ち会うことができます。立ち会いを希望される場合は、開票日時・場所の詳細を追って連絡いたしますので、選挙管

理委員長までご連絡ください。

6. その他、不明な点などございましたら下記宛ご連絡ください。

投票用紙送付先および連絡先

〒501-1193

岐阜県岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学・応用生物科学部・生物環境科学課程

日本植物分類学会 選挙管理委員長 川窪 伸光

TEL & FAX: 058-293-2855; E-mail: kawakubo@gifu-u.ac.jp

## 評議員会からの会長候補の推薦

評議員 西田 佐知子

本学会では役員等の選出についての細則第2条に、「評議員会は若干名の会長候補を推薦することができる」と定めてあります。そこで評議員会より、下記のとおり会長候補を3名推薦します。

なお、評議員会からの推薦は、学会員の皆さんの推薦候補以外への投票を妨げるものではありません。どうぞ熟考の上、評議員会からの推薦候補である・ないにかかわらず、もっとも適任と思われる方に大切な一票を投じてください。よろしくおねがいます。

推薦する候補者（五十音順・敬称略）：角野 康郎，高宮 正之，西田 治文

## 諸報告

### 日本植物分類学会第13回大会報告

第13回大会実行委員長 副島 顕子

2013年度の日本植物分類学会第13回大会は、3月20日（木）から23日（日）まで、熊本大学黒髪南キャンパス（熊本市）において開催されました。参加者総数は203名（一般158名〔うち当日22名〕、学生45名）で、口頭発表47件（講演中止1件）、ポスター発表64件の研究発表が行われました。大会発表賞へのエントリー数は口頭発表20件、ポスター発表22件でした。3月22日の晩に開かれた懇親会の参加者数は150名で、アルバイトを含めると総勢約160名となりました。最終日の午後開催され



討論風景

た一般公開シンポジウムでは、4名の演者の方に阿蘇の草原フロアの歴史や再生についての講演をしていただき、一般からも約30名の参加がありました。これら多数の皆様のご参加をいただき、たいへんな盛況のうちに会期を終える事ができました。ご参加いただいた皆様には心からのお礼を申し上げます。また、今回の大会では熊本市の観光促進事業を行っている熊本国際観光コンベンション協会から助成金の他、無料で駅や空港、会場に歓迎の看板を提供していただきました。ここにあわせてお礼を述べさせていただきます。

熊本大学黒髪南キャンパスは宿泊所の多い街からバスで約 15 分、キャンパス脇を流れる白川沿いに歩いてくる方もおられたようです。会場となったのは工学部の建物ですが、広い吹き抜けのロビーとその正面に2部屋のポスター会場、2階の大講義室を講演会場として、その向かいに休憩室を配することで、かなりゆとりとしたスペースとなりました。キャンパス内には五高時代の古いレンガ造りの建物もあり、お配りしたキャンスマップを手に散策していただくこともあったかと思えます。会期直前に寒い日が続いたせいで開花予想がはずれ、サクラの蕾がまだ固かったのは残念でしたが、大きな天候の崩れもなく安心してました。



ポスター会場

プログラムの編成にあたっては、まず最初に発表賞エントリーの 20 件、その他の口頭発表はなるべく関連のあるテーマが同じブロックになるように心がけましたが、ところどころ多様なテーマのブロックになり、お引き受けいただいた座長の方にはご苦勞をおかけしてすみませんでした。今回はポスターの発表賞エントリーも 22 件と少なめでしたので、初日に全ての審査を終えていただき、その日のうちに選考会議、翌日の総会での受賞者発表をしてもらうことができたのはよかったです。二日目の総会、学会賞・発表賞授与式が長引き、その後の受賞者記念講演も多少の時間超過がありました。予定の範囲内で収まり、ポスター発表時間を少し短縮することで懇親会会場への移動をスムーズにいただけました。皆様のご協力に感謝します。



懇親会会場

懇親会会場のフェリシアは各種イベントや結婚式の二次会によく使われるパーティ会場で、ちょっと気の利いた料理とお酒を用意してもらえました。立席で 140 名くらいまでなら大丈夫、といわれた空間に 160 名を詰め込む事になってしまい、移動もままならない混雑でたいへん申し訳ありませんでした。お酒は会場のドリンクバーの他、日本酒は準備委員会が準備した熊本の地酒 3 種を楽しんでいただきました。また、今回は球磨焼酎酒造組合の協賛により、人吉にある球磨焼酎全 28 蔵から 1 本ずつ焼酎を提供していただいた上、組合長自らのご来場で解説や飲み方指南というサービスをしていただきました。ここに深くお礼を申し上げます。そして、お酒のご寄付をくださった会員の皆様にもありがとうございました。



球磨焼酎

3日目の午前中の一般講演も滞りなく、最後には分類学会初のギター生の演奏も供されて好評でした。午後の公開シンポジウムは、地元の植物愛好家の方々の参加も多数あり、阿蘇の草原植生に対する一般の関心の強さをうかがうことができました。演者の皆様には、新鮮で興味深い話題提供をありがとうございました。

最後に、大会の運営にご協力いただいた学会事務局の皆様、大会運営に直接関わってくださった関係者の皆様に心から感謝いたします。受付やクローク、講演の進行や休憩室の世

話など、実質的な作業はほとんど熊大の学生がやってくれましたが、多くの方からホスピタリティのいい学会だったと言ってもらえたのはひとえに彼らの気配りと働きによるものです。本当にありがとうございました。

## 2014 年度大会発表賞の報告

大会発表賞選考委員長 西田 佐知子

今回の大会発表賞には、口頭発表に 20 件、ポスター発表に 22 件の応募がありました。学会長、評議員、昨年度大会の発表賞受賞者から構成される 14 名の選考委員が検討した結果、受賞者は次のとおりとなりました。

### 口頭発表部門（五十音順）

掛澤 明弘 氏「屋久島の高山性ミニチュア植物ヒメコナスビの小型形態には遺伝的バックグラウンドが存在する」

末次 健司 氏「鹿児島県三島村で発見されたタケシマヤツシロラン - 光合成も開花もやめた新種のラン科植物 -」

高橋 佑磨 氏「ニワゼキショウにおける色彩多型の維持と空間変異の成立機構」

### ポスター発表部門

首藤 光太郎 氏「思ったより複雑なイチヤクソウの種内変異 - 赤く葉が退化した植物の実体 -」

以下に、選考会議の際に出た意見を思い起こしながら、それぞれの受賞者が選考に際して評価された点、また、今回の発表全体に対する印象（今後、高評価を得る発表につながるかもしれないヒント）をごく簡単に挙げたいと思います。

掛澤氏は、屋久島にみられる植物の小型化という現象に注目し、その形態変化が表現形の可塑性から生まれるのか、それとも遺伝的に固定されたものなのかを、ヒメコナスビを使って調査しました。様々な標高から集めたヒメコナスビを大量に栽培して調査するという、労を厭わぬ研究姿勢や、それらの丁寧な解析が評価されました。

末次氏は、菌従属栄養植物、しかも咲くことさえしない植物の発見という発表です。末次氏は今までにもこうしたユニークな植物を発見し発表してきましたが、それらを上手に振り返りつつ新しい発見を紹介することで、改めて氏の「見つける力」のすばらしさをアピールした発表となりました。

高橋氏は、種内の多様性が集団中でどうやって維持されるのか、とくに、花の形質という、ポリネーションを考えるとつづは多数派が有利になっておかしくないものが多型のまま維持される仕組みはどこにあるのかを、ニワゼキショウを使って実証しました。動植物を超えて重要なテーマを、身近な植物を使ってスマートに実証する手腕に、高い評価が集まりました。

首藤氏は、イチヤクソウの色彩多型の実態を明らかにするため、日本各地を丹念に回ってサンプリングと生態調査を行いました。赤い葉の個体の分布情報と分子系統解析、それらから考察した結果をわかりやすくポスターにまとめ発表しました。

受賞者 4 人をまとめて評価するのは乱暴な話ですが、あえて言えば、今回の受賞者は自分の発想や自力での研究計画・研究実施という部分をうまくアピールし、聴く者・見る者に迫力を感じさせる発表をしていた印象があります。自分の発見を伝えたいという気持ちが前に出ている、聴衆に顔の向いた発表態度も高い評価を得ました。

2006 年から大会発表賞が設けられ、授賞はこれで 8 回目になります。発表のレベルは年々



上がっている気がしますし、新規参加者も増え、大会が活発になって嬉しいかぎりです。なお、今大会でも応募者の発表技術はどれも優れたものでありましたが、とくに口頭発表の上手さが目立ちました。その理由と言えるかどうかはわかりませんが、口頭発表はその多くで、イントロダクションが充実していたという感がありました。ポスター発表については、それぞれが研究している植物やテーマがどのような重要性を持つのか、また、その研究の背景（自他含む研究者による研究の流れ）などがわかると、より高い評価につながるだろうという意見が審査員から出ていました。ポスターはわかりやすくするためにシンプルな発表を心がけるものですが、研究の重要性をアピールするためには、研究の意義や背景を上手に示すことが不可欠なことでしょう。

来年度も応募を考えているみなさん、学会を盛り上げる迫力ある発表を楽しみにしています。

## 2014 年度大会発表賞受賞者喜びの声 & 研究アピール

ニュースレター編集幹事 海老原 淳

今回は受賞者の皆様にフリースペースを提供しまして、喜びの声をお伝えします。

こんにちは。口頭発表賞をいただきました、京都大学の掛澤明弘です。

私は屋久島の高地における植物の小型化現象について、サクラソウ科のコンナスビと、その屋久島高地に固有な小型変種であるヒメコンナスビという植物を主なターゲットに研究しています。この度は、コンナスビとヒメコンナスビ約800個体を用いた共通圃場実験から、両者の9つの形態形質における差異が遺伝的なバックグラウンドによるものであることを明らかにし、その成果を発表しました。今回の受賞を励みにして、一日も早くこの研究成果を論文にしたいと思えます。

私は今後、小型化にかかわる遺伝子の同定を目指したQTL解析や、小型化を促す自然選択圧の解明を目指して高地の条件を再現した共通圃場実験をしていこうと考えています。今回の共通圃場実験を遂行するにあたり、大量の個体の維持管理や、連日の圃場での形態計測など大きな苦労がありましたが、完遂した今では、「あれができたのならば、次もきっとやり抜けるだろう」と、私の研究を先に進めていく上で大きな自信となっています。

最後になりましたが、早朝から夜中までかかった計測の途中で、何度もノグスを握ったままスリープしそうな私を軽妙なトークで刺激しつつ、最初から最後までPCIにデータの打ち込みをしてくださった篠原渉先生には本当に感謝しております。



コンナスビ(上)と  
ヒメコンナスビ(下)

口頭発表賞をいただきました末次健司です。予想外の受賞でしたが、今後より一層精進したいと思えます。私は、他の生物から養分を略奪するという特異な進化を遂げた従属栄養植物の研究をしています。これらは、奇異な形態から、古くから人々の関心を集めてきました。その一方、開花、結実期以外は姿を現さないため、分布情報すら明らかでない種が多いのが現状です。そこで私は、まずフィールドでの従属栄養植物の精力的な探索と記載分類を並行して行っています。そしてその上で、従属栄養植物が生活史を全うするためにどのような適応を遂げたのか解き明かしたいと考えています。実は今回の学会の帰りに鹿児島に足を伸ばしたのですが、また未記載種と思われる従属栄養植物を発見してしまいました。次回大会までには報告しておきたいと思えます。

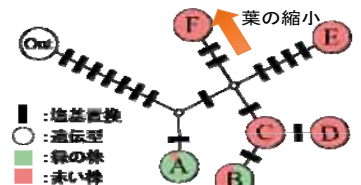


閉鎖花のみをつける  
タケシマヤツシロラン



はじめまして、  
 東北大学の 高橋 佑磨 と申します。  
 遺伝的多様性の進化と  
 その副次的機能をキーワードに、  
 動植物問わず研究を行なってます。  
 左の写真はここ数年私が調べている  
 ニワゼキショウです。身近な植物ながら  
 モノクロ写真でわかるほど明確な  
 色彩2型を示す興味深い生物です。

福島大学の 首藤 光太郎 (しゅとうこうたろう) です。私は、赤い花茎を持ち、葉が連続的に縮小し、菌従属栄養的に進化したと考えられているヒトツバイチヤクソウを題材に研究を行っています。形態調査と分子系統解析から、菌従属栄養的な進化が複数の異なる系統によって生じ、1系統のみが極端に葉を縮小させていることを明らかにしました。  
 初日の夜、居酒屋からの帰路に、市電の同じ車両に偶然乗り合わせた志賀 隆 さんから握手を求められ、「おめでとう」とだけ言葉を頂きました。これを見た研究室のメンバーが、「発表賞だ!」と盛り上がっているのを見ながら、受賞に気がつきました。その反面、「聞き間違いや別の用事だったら恥ずかしいなあ」と不安もありました。ですので、総会・学会賞授与式で名前を呼ばれた時は、心底ホッとしました。  
 普段から、「ぱっと見」がいいようなポスターを作ることを心がけています。今回は、文字の大きさを40ポイント以上と決め、重要な形質の1つであるイチヤクソウの花茎の色とポスターの色遣いが重なるようにこだわって、デザインしました。このような形で評価していただき、大変光栄です。



図：葉をもつイチヤクソウ(左上)と葉が退化したヒトツバイチヤクソウ(右上)と今回確認されたハプロタイプネットワーク(下)

## 庶務報告 (2014年2月～5月)

庶務幹事 志賀 隆

第30回国際生物学賞受賞候補者を推薦した(5月16日)。

## 2014年度第1回評議員会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

会場：熊本大学黒髪北キャンパス くすのき会館レセプションルーム

日時：2014年3月20日(木) 16時30分～21時30分

参加者

評議員：( )内は被委任者

出席 [9名]:西田 佐知子 (議長), 秋山 弘之, 池田 博, 大村 嘉人, 梶田 忠, 田村 実, 西田 治文, 仲田 崇志, 藤井 伸二

委任状出席 [3名]:村上 哲明 (西田 佐知子),永益 英敏 (西田 佐知子),副島 顕子 (西田 佐知子)

幹事会・委員会委員長:( )内は役職

出席 [14名]:角野 康郎 (会長),志賀 隆 (庶務),保坂 健太郎 (会計),鈴木 武 (図書),海老原 淳 (ニュースレター),福原 達人 (ホームページ),田村 実 (編集委員長・英文誌編集),東 浩司 (和文誌編集),黒沢 高秀 (植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合),西田 治文 (自然史学会連合),岡崎 純子 (講演会),西野 貴子 (野外研修会),高宮 正之 (学会賞選考委員長),藤井 伸二 (絶滅危惧植物専門第一委員会委員長)

欠席 [4名]:大橋 広好 (国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会),奥山 雄大 (学術会議若手アカデミー担当委員),樋口 正信 (絶滅危惧植物専門第二委員会委員長),伊藤 元己 (植物データベース専門委員会委員長)

1. 評議員会開催にあたり,角野会長から挨拶があった。
2. 庶務幹事により定足数が確認された。会長,評議員9名の出席,3名の委任状出席があり,評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として西田佐知子氏が,議事録署名人として西田治文氏,梶田忠氏の2名が選出された。

#### 4. 報告事項

- 4.1. 自然史学会連合関連報告 2014年度活動報告および2015年度活動計画。
- 4.2. 日本分類学会連合報告 2014年度活動報告および2015年度活動計画。
- 4.3. 植物分類学関連学会連絡会報告 2014年度活動報告および2015年度活動計画。
- 4.4. 学術会議若手アカデミー報告 2014年度活動報告および2015年度活動計画。
- 4.5. 各種委員会に関する報告
  - (1) 編集委員会 英文誌『APG』および『分類』の編集状況。
  - (2) 学会賞選考委員会 日本植物分類学会賞の選考経過。
  - (3) 論文賞選考委員会 日本植物分類学論文賞の選考経過。
  - (4) 植物データベース専門委員会 現状説明と活動報告。
  - (5) 絶滅危惧植物専門第一委員会 現状説明と活動報告。
  - (6) 絶滅危惧植物専門第二委員会 現状説明と活動報告。
  - (7) 国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会 現状説明と活動報告。
- 4.6. 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況の説明。
- 4.7. 日本植物分類学会講演会報告 2013年度実施報告および,2014年度準備状況。
- 4.8. ニュースレターに関する報告 2013年度実施報告および,2014年度準備状況。
- 4.9. ホームページ・メーリングリスト関連報告 学会公式HPおよびMLの運用状況。
- 4.10. 会務報告 2013年度の事業報告。
- 4.11. 会計報告 2013年度の会員状況,会費納入状況。
- 4.12. その他
  - (1) 野外研修会について 2013年度実施報告および,2014年度準備状況。
  - (2) 次期会長・評議員の選出について
  - (3) 学会賞受賞者の大会参加費と懇親会費について

#### 5. 審議事項

##### 5.1. 2013年度事業報告(案)について

志賀庶務幹事より2013年度事業報告(案)が提案され,質疑後,2項目の修正が行



われた後に承認された。

#### 5.2. 2013 年度決算報告（案）について

保坂会計幹事より2013 年度決算報告（案）が提案され、質疑後、1 項目の修正が行われた後に承認された。

#### 5.3. 2014 年度事業計画（案）について

志賀庶務幹事より2014 年度事業計画（案）が提案され、質疑後、3 項目の追加・修正・削除が行われた後に承認された。

#### 5.4. 2014 年度予算（案）について

保坂庶務幹事から2014 年度予算（案）が提案され、質疑後、7 項目の削除・修正が行われた後に承認された。

#### 5.5. 学会会則の変更について

志賀庶務幹事より事務局の所在地に関する会則変更が提案され、質疑後、3 項目の修正が行われた後に承認された。

#### 5.6. 刊行物の在庫処理について

鈴木図書幹事より刊行物の在庫処理案が提案され、質疑後、1 項目の削除が行われた後に承認された。

#### 5.7. 名誉会員の推薦について

角野会長より名誉会員の条件（会則第5条）を満たしている会員4名の名誉会員への推薦がなされ、審議の結果、承認された。

#### 5.8. 除名について

角野会長より4年分以上の会費を滞納している会員5名の除名について提案があり、審議の結果、承認された。

#### 5.9. 次期会長、評議員の選挙について

『役員等の選出についての細則』第2条、「評議員会は若干名の会長候補を推薦することができる。」ことに則り、評議員会から推薦する会長候補を決定した（推薦候補者は2ページ参照）。

#### 6. その他

##### 6.1. 第14 回大会開催地について

角野会長より説明があり、黒沢高秀氏（福島大学）のお世話により、福島大学（福島市）において2015 年3 月5 日～8 日の日程で開催されることが承認された。

##### 6.2. 植物分類学会日中韓3 国シンポジウム進捗状況

角野会長より進行状況の説明があり、国際シンポジウム開催の準備を進めることが了承された。

##### 6.3. ABS 問題への対応について

志賀庶務幹事より、ABS 制度に対して日本植物分類学会として適切に対応していくために、「ABS 問題対応委員会（仮称）」の設置が提案され、了承された。

##### 6.4. 普及教育に関するワーキンググループの設置について

角野会長より進行状況の説明があった。

##### 6.5. 総会議事について

志賀庶務幹事より2014 年度総会議事次第（案）が説明され、承認された。

## 2014 年度総会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

会場：熊本大学黒髪南キャンパス 工学部2号館

日時：2014 年 3 月 22 日 13:45 ~ 15:20

1. 総会に先立ち角野会長から挨拶があった。
2. 高宮正之大会会長から挨拶があった。
3. 逝去された学会員への黙祷が捧げられた。
4. 志賀庶務幹事より総会出席者が 129 名（後に 140 名）であることが報告された。
5. 川窪伸光氏が総会議長に選出された。

### 6. 報告事項

#### 6.1. 会務報告

志賀庶務幹事より、報告内容は第一号議案と同じであるので議案審議の際に報告するとの説明があった。

#### 6.2. 会員数について

保坂会計幹事より、通常会員数が減少傾向にはあるものの、名誉会員の増加による減少と会費滞納による除名によるものが主であることが説明された。

#### 6.3. 各委員会からの報告

##### ・編集委員会

田村編集委員長から編集状況の説明があった。これまで問題になっていた英文誌の発行の遅れが解消されたこと、2014 年度は年3号発行（2 月、6 月、10 月）を行う予定であるとの報告があった。また、英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』にインパクトファクターを付けることができるように活動を進めるとの説明があった。

##### ・絶滅危惧植物専門第一委員会

藤井委員長から、2012 年度に公表されたレッドリストをもとにレッドデータブックの改訂作業が進められているとの報告があった。また、種の保存法の改定による追加種の選定に対して、委員会として協力していくとの説明がなされた。

##### ・絶滅危惧植物専門第二委員会

樋口委員長に代わり保坂会計幹事から、レッドデータブックの改訂原稿を環境省へ提出したとの報告があった。

##### ・植物データベース専門委員会

伊藤委員長に代わり海老原委員から、国内の維管束植物標本の実態把握を行い、機関からは約 80 件、個人からは約 20 件の回答を得て、日本分類学会連合に報告したとの説明があった。

##### ・国際植物命名規約（メルボルン規約）邦訳委員会

大橋委員長に代わり仲田委員から、編集作業の進行状況の説明があり、2014 年 4 月に出版予定であることが報告された。

##### ・学会賞選考委員会、論文賞選考委員会、大会発表賞選考委員会

総会後の表彰式において、審査結果の報告が行われた。

#### 6.4. 除名について

角野会長より、会則第 10 条にもとづき以下の5名について除名を行ったとの報告があった。  
倉本 嗣王，西澤 徹，桂川 靖夫，前泊 集，吉津 祐子。

### 7. 審議事項

- 7.1. 第一号議案 2013年度事業報告、ならびに2013年度決算報告書の承認の件  
前年度の事業報告と決算報告が志賀庶務幹事と保坂会計幹事よりそれぞれ行われた。  
五百川監事より、会務および会計が適切に行われているとの監査報告があった。  
審議の結果、賛成130票、反対8票で出席者(138人)の3分の2以上をもって承認された。
- 7.2. 第二号議案 2014年度事業計画、ならびに2014年予算案承認の件  
志賀庶務幹事と保坂会計幹事より上記二件について説明があった。  
審議の結果、賛成127票、反対13票で出席者(140人)の3分の2以上をもって承認された。
- 7.3. 第三号議案 学会会則の変更について  
角野会長より、事務局の所在地に関する会則変更が提案された。  
審議の結果、1項目の修正が行われ、賛成130票、反対10票で、出席者(140人)の3分の2以上をもって承認された。なお、会則の変更内容は以下の通りである。
- ・第18条  
(変更前) この会則は、総会において出席者の3分の2以上の同意を得なければ変更できない。  
(変更後) この会則は、総会において出席者の3分の2以上の同意を得て変更できる。ただし、第19条の本会の所在地については評議員会の承認をもって変更できる。
  - ・第19条  
(変更前) 本会の事務を処理するため、事務局を置く。事務局は庶務担当幹事が主宰する。  
(変更後) 本会の所在地は茨城県つくば市天久保4-1-1とする。
  - ・第21条(新規追加)  
本会の設立年月日は2001年5月12日とする。
  - ・附則  
本会則は2014年3月22日より実施する。
8. その他
- 8.1. 第13回大会開催地について  
角野会長より次回第14回大会についての告知がなされ、黒沢次期大会会長(福島大学)より挨拶があった。
- 8.2. 野外研修会について  
西野委員より青森県八甲田山周辺にて7月開催予定であることが説明され、世話役である米倉浩司氏(東北大学)より挨拶があった。
- 8.3. ABS問題への対応について  
藤井委員より2014年度から設置された「ABS問題対応委員会」の活動予定について説明がなされた。

## 2014年度事業計画および予算

庶務幹事 志賀 隆

### (1) 集会等の開催

- ・学術集会、講演会、研修会  
年次学術集会(日本植物分類学会第13回大会:3月20~23日熊本大学黒髪南キャンパス)を開催する。  
2014年度講演会(12月を予定、大阪学院大学)を開催する。  
2014年度野外研修会(青森県八甲田山周辺)を開催する。

## ・ 総会，評議員会

年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3月22日）。  
評議員会を開催する（3月20日）。

## (2) 出版物の刊行

## ・ 学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第65巻1～3号（計3冊）を発行する。

和文誌『分類〔日本植物分類学会誌〕』第14巻1～2号（計2冊）を発行する。

## ・ ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』52～55号（計4冊）を発行する。

## ・ 『国際藻類・菌類・植物命名規約（メルボルン規約）2012〔日本語版〕』を発行する。

## (3) 委員会活動

以下の委員会を組織し，目的に沿って活動する。

- ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・ 植物データベース専門委員会
- ・ 学会賞選考委員会
- ・ 大会発表賞選考委員会
- ・ 論文賞選考委員会
- ・ 国際命名規約邦訳委員会
- ・ ABS問題対応委員会

## (4) 表彰

- ・ 日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会論文賞の授与を行う。

## (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・ 国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議，自然史学会連合，日本分類学会連合など。
- ・ The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)，および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携する。
- ・ 国際シンポジウム開催の準備を進める。

## (6) その他

- ・ 学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・ 植物分類学関連情報（学術集会，研究動向，出版物，公募）を収集し，ニュースレター，ホームページ等で提供する。
- ・ 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。
- ・ 植物分類学研究マニュアルの作製と和文誌『分類』への原稿掲載を進める。
- ・ 普及教育に関する委員会の設置に関連して，会長が諮問するワーキンググループを設置する。
- ・ 会長・評議員の選挙を行う。

## 2014年度予算 一般会計

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常（一般）	5000	745	3725000	50000	注1
通常（学生/海外）	3000	97	291000	15000	注1
団体会員	8000	21	168000	△ 24000	注1
バックナンバー販売			100000	0	
命名規約販売			20000	0	
利息			1000	0	
雑収入			50000	0	
合計			4355000	41000	

### 支出の部

大会補助費			100000	0	
講演会補助費			70000	20000	注2
出版物印刷費					
APG vol. 65 (1, 2, 3)	720000	3	2160000	△ 1090000	注3
分類vol. 14 (1, 2)	750000	2	1500000	400000	注4
ニュースレターNo. 52-55	55000	4	220000	0	
英文校閲費			50000	0	
出版物送料					
APG送料	80	3300	264000	△ 176000	注5
和文誌送料	80	2000	160000	0	
NL送料	60	4000	240000	0	
会議費			50000	0	
学会賞表彰経費			60000	0	
自然史学会連合負担金			20000	0	
分類学会連合負担金			10000	0	
事務局管理費					
消耗品費			50000	0	
交通費			100000	0	
アルバイト賃金			470000	0	注6
封筒等印刷費			0	△ 250000	注7
通信費（小包手数料を含む）			70000	0	
手数料・その他			30000	0	
自動振替集金代行基本料			3150	0	
自動振替口座確認手数料	126	170	21420	0	
自動振替新規手数料			0	0	
レンタルサーバー使用料			26000	0	
国際シンポジウム積立金			300000	0	
予備費			150000	50000	注8
合計			6124570	△ 1046000	

単年度収支	△ 1769570
前年度からの繰越金	8653766
次年度への繰越金	6884196

注1：会員数見直しによる（新入会、名誉会員増、退会・除名・逝去など）

注2：前年度までの実績に応じて変更

注3：カラー印刷増および消費税増のため単価は上がるが、昨年度の5号刊行から通常通り3号刊行となるため

注4：分類学マニュアル掲載（15巻1号で終了予定）によるページ増および消費税増のため

注5：昨年度の5号刊行から通常通り3号刊行となるため

注6：編集業務補助を増加した他、前年度までの実績に基づく

注7：執行部変更を伴わないため

注8：会長・評議員の選挙費用、受賞者招へい経費および消費税増による調整を含む



## 特別会計

収入	2014年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2839121	△ 6890
国際シンポジウム積立金	300000	0 注1
命名規約和訳販売	1378600	1378600 注2
寄付	0	0
利息	0	0
合計	4517721	1371710

支出	2014年度予算	前年度予算との差異
命名規約和訳出版	1889121	89121 注3
国際シンポジウム準備金	900000	900000 注4
日中韓シンポジウム若手派遣	0	△ 350000 注5
次年度への繰越金	1728600	732589
合計	4517721	1371710

注1: 2012年度より一般会計から移管

注2: 出版社との契約に基づく

注3: 出版にともなう経費(会議費含む)

注4: 開催に係る準備金

注5: 今年度は海外での開催は無いため

## お知らせ

## 2014 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ

東北大学植物園 米倉 浩司

「青森県八甲田山系ブナ帯の植物」

日程: 2014 年 7 月 11 日 (金) ~ 7 月 13 日 (日)

第一日目 (11 日) 15:10 に青森市酸ヶ湯 (すかゆ) 温泉近くの東北大学植物園八甲田山分園 (900m) に集合。簡単なガイダンスの後, 八甲田山分園内を散策。17:00 に酸ヶ湯温泉に入浴, 八甲田山分園にて夕食。夕食後, 八甲田山系の植物の特色に関する紹介, 懇談会。八甲田山分園泊。

第二日目 (12 日) 7:00 起床, 酸ヶ湯温泉にて朝食, 昼食 (弁当) を準備の後, バスで田代平 (550m) に移動 (移動時間 40 分程度)。その後, 徒歩で十和田市営牧場へと移動し, 牧場周辺の植物の観察。午後は田代湿原に移動し 2 時間ほど散策 (ここでの採集は不可)。16:00 にバスで八甲田山分園へと戻り, 17:00 に酸ヶ湯温泉に入浴, 八甲田山分園にて夕食。夕食後, 研修成果の交換を行う。八甲田山分園泊。

第三日目 (13 日) 7:00 起床, 酸ヶ湯温泉にて朝食。解散。希望者は大岳 (八甲田山最高峰, 1,584m) 登山。

今年度の野外研修会は本州北端に位置する八甲田山系の中腹において行います。八甲田山は最高峰の大岳 (1,584m) をはじめとする多数の峰の集まりで, 標高 900m (東北大学植物園八甲田山分園はこの辺りに位置します) 付近を境に上部はオオシラビソ (アオモリドマツ) の林ですが, それ以下の標高には広大なブナ林が広がっています。散策地の田代平は山の中腹に広がる古いカルデラ跡の盆地で, 古くから牧場として開拓されてきた関係で植生は原生的ではありませんが, 盆地内をゆったりと流れる駒込川沿いを中心にブナ帯や寒地生の様々な植物を観察することができます。また, 盆地の最底部に位置する田代湿原は八甲田を代表する高層湿原の 1 つで, 様々な湿原植物を観察でき, 7 月中旬にはキンコウカの花が見頃となっているものと期待されます。

また、宿泊場所の東北大学植物園八甲田山分園は、元来東北（帝国）大学附属八甲田山植物実験所として1929年に設立され、永年にわたり高山環境における植物生態学や花粉分析学などの先駆的な研究が行われてきた歴史を持ちます。園内はブナ帯とオオシラビソ帯との移行帯に位置し、火山性地形や湿原もあって八甲田の代表的な植物を労せず観察することができます。この時期ではツルコケモモやハクサンシャクナゲの花が見頃です。

参加費用（東北大学植物園八甲田山分園に宿泊の場合。食事代や散策時の交通費を含みます）：

16,000円程度。初日に集金させていただきます。

八甲田山分園への行き方：

JR新青森駅（東北新幹線）またはJR青森駅（奥羽本線、津軽海峡線）から十和田湖行きJRバス「みずうみ号」（1日4便）で酸ヶ湯温泉まで1時間半ほど、料金1,340円。

青森駅13:30発、新青森駅13:50発の便で酸ヶ湯温泉に15:01着。これ以降の便はありません。この前の便は、青森駅をそれぞれ7:50、9:50、11:20に出ます。新青森駅発はそれぞれその20分後です。

酸ヶ湯温泉からは十和田湖方面（登り方向）に車道沿いに歩いて約5分で八甲田山分園に到着します。

自家用車をご利用の方は、東北自動車道黒石ICから十和田湖、酸ヶ湯温泉方面に車を走らせて30分程度で酸ヶ湯温泉に到着します。酸ヶ湯を過ぎて十和田湖方向に走りますとすぐ、右側に大きな環境省の大形の駐車場がありますのでそちらにご駐車下さい。八甲田山分園はそこから道なりに十和田湖方向に歩いて1分の所にあります。運転にはくれぐれもお気をつけ下さい。

航空機利用で青森空港に到着される場合、青森空港からのバスの便は非常に悪いため不経済です。事前に米倉（連絡先は下を参照）までご連絡下されば車で送迎いたします。その際には13:00までに青森空港まで到着されますようお願い申し上げます。

申し込み：〒030-0111 青森県青森市大字荒川字南荒川山1-1

東北大学植物園八甲田山分園 米倉 浩司 宛

TEL & FAX 017-738-0621（6月2日以降）。5月までは022-795-6765（東北大学植物園）にお願いします。申し込み締め切りは6月末まで、厳守でお願いいたします。

E-mail: yonekura@m.tohoku.ac.jp

できるだけメールでの申し込みをお願いいたします。八甲田山分園にはスタッフが米倉1人しかいない関係で、電話がつながりにくい点ご了承下さい。申し込みの際には、氏名、性別、連絡先住所、電話番号、メールアドレス、交通手段を明記下さい。八甲田山分園の宿泊定員の関係上、申し込み順に20名程度で締め切らせていただく予定です。八甲田山分園は学生実習のための宿泊施設として作られていますので、静寂環境下での就寝を希望される方や深夜まで酸ヶ湯温泉を堪能したい方がいらっしゃいましたら酸ヶ湯温泉での宿泊もアレンジいたします。ただし、料金は割高となりますのでご了承下さい。酸ヶ湯温泉宿泊を希望されます方は、できるだけ早めにご連絡下さい。

## 野外研修会申込みのキャンセルについてご留意ください

野外研修担当委員 西野 貴子

東北大学の米倉浩司氏にお世話いただき、今年度も非常に魅力的な野外研修会のプログラムが準備されています。多くのご参加をお待ち申し上げます。

さて、この野外研修会は、学会統合が行われる前の植物分類地理学会から引き継がれてきた伝統ある催事です（歴史的な経緯については、ニュースレター1号に村田源先生がご寄稿されています）。日本全国各地で行われ、その主催はすべて善意によって継承されてきたものです。

基本的に野外研修会は受益者負担ということで、参加費だけで開催経費を賄っております。しかし大変残念ではありますが、ときには参加者側の個人的な事情によりキャンセルとなることもあります。致し方ないとはいえ、主催者側にとってキャンセル対応は、経費的にも精神的にも大きな負担となります。このような負担が開催していただくリスクとなってしまうのは、いずれ野外研修会の継続にも差し支えかねない状況を生み出します。

善意で開催していただく方への負担を少しでも軽減し、伝統ある野外研修会をこれからも継承していくためにも、キャンセル期限を設定させていただくことにしました。どうぞご理解いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

**2014年度 野外研修会（八甲田山系）のキャンセル期限：6月末まで。**

大変恐れ入りますが、7月以降、当日までのキャンセルの場合には、各個人の参加費用の全額を後日、振り込み等でご負担いただきます（参加経費は16,000円程度の見込みですが、前後しますことをご了承ください）。

## 日本植物分類学会第14回大会のお知らせ

第14回大会会長 黒沢 高秀

日本植物分類学会第14回大会を、2015年3月5日（木）から8日（日）に福島大学において開催いたします。大会および参加申し込み等の詳細は、大会ホームページおよび11月号のニュースレターでお知らせいたします。多数のご参加をお待ちいたします。

【会場】福島大学（福島県福島市金谷川1）

【日程】

2015年3月5日（木）：各種委員会、評議員会

3月6日（金）～7日（土）：研究発表、総会、受賞講演、懇親会など

3月8日（日）：研究発表、公開シンポジウム

【ホームページ】現在作成中、アクセス可能になり次第、分類学会ホームページ等にてご連絡いたします。

【問い合わせ先】日本植物分類学会第14回大会（福島大会）準備委員会

〒960-1296 福島市金谷川1 福島大学共生システム理工学類

黒沢高秀（大会会長）

TEL & FAX: 024-548-8201; E-mail: kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp

## 『国際藻類・菌類・植物命名規約（メルボルン規約）2012 日本語版』が出版されました

国際命名規約邦訳委員会

植物の学名に関する国際的な取り決めである国際命名規約の最新版 *International Code of Nomenclature for Algae, Fungi, and Plants (Melbourne Code)*: adopted by the Eighteenth International Botanical Congress, Melbourne, Australia, July 2011 (McNeill et al. 2012 [eds.]) の日本語版が出版されました。

国際植物命名規約はほぼ6年ごとに改訂され、規約は過去に遡って適用されるため、学名の取扱いには常に最新の規約に従う必要があります。今回の改訂では特に大きな変更があり、規約の全体構成も見直されています。翻訳は日本植物分類学会国際命名規約邦訳委員会（委員長：大橋広好東北大学名誉教授）が担当し、国際植物分類学会から日本語版として承認されています。

全国の書店または北隆館のホームページ <http://www.hokuryukan-ns.co.jp/> から注文できます。北隆館へ直接注文された場合の送料（郵便払込用紙による前払い、かつ国内発送に限り）は、当分の間出版社負担としてくださるそうです。なお、払込手数料は申込者負担となります。また、代引きによるご購入の場合は送料・手数料とも申込者の負担となりますので、ご注意ください。

『国際藻類・菌類・植物命名規約（メルボルン規約）2012 日本語版』

日本植物分類学会 国際命名規約邦訳委員会（訳・編集）、北隆館（発行）

ISBN978-4-8326-0984-6 B5判 263頁 上製本 定価2,800円（本体2,593円＋税8%）

## バックナンバーの特別価格販売について

図書幹事 鈴木 武

植物分類学会の『APG』『分類』、旧植物分類地理学会の『植物分類、地理』のバックナンバーを通常価格の10%で学会会員に販売します。2015年3月31日までの予定です。

○『APG』52巻1号(2001)～62巻1号(2011) 200円（通常2,000円）

○『分類』1巻1/2号(2001)～12巻1号(2012) 100円（通常1,000円）

○『植物分類・地理』14巻1号(1949)～51巻2号(2001)

巻号によりますが、50～300円の範囲です。

送料は別途になります。

電子データでCiNiiで公開されていますが、紙ベースも便利でまとめて購入するよい機会かと思えます。問い合わせは図書幹事 鈴木まで連絡下さい。

〒669-1546 兵庫県三田市弥生ヶ丘6丁目 兵庫県立人と自然の博物館内

日本植物分類学会 図書関連担当 鈴木 武

TEL: 079-559-2001 FAX: 079-559-2007 E-mail: tosho@e-jspcs.com

## 寄稿

### 学名のラテン語 (15)

永益 英敏 (京都大学総合博物館)

#### 種と種内分類群の学名の形容語——同格の名詞

形容語として属名と同格の名詞を使うことができる。同格と表現するのは、学名がラテン語の判別文や記載文などの文章中で別の格 (対格や奪格など) をとるときには、この名詞も属名と同じ格をとるからである。

名詞として扱われる形容語には本来のラテン語由来のものだけではなく、さまざまな言語に由来するものが多い。外来の有用植物で外来語をそのまま用いた例や、現地名をそのままラテン語化したものがある。

[例] ヨーロッパナラ *Quercus robur* L. (ラテン語の中性名詞 *robur*); ニンジン *Daucus carota* L. (ギリシャ語の *karoton* をラテン語化した女性名詞 *carota* から); クスノキ *Cinnamomum camphora* L. (マレー語 *kapur* から派生したアラビア語 *kafur* を経てラテン語化した女性名詞 *camphora*); ハトムギ *Coix lacryma-jobi* var. *ma-yuen* (Rom.Caill.) Stapf (*ma-yuen* は後漢の武将、馬援の名から); カカオ *Theobroma cacao* L. (メキシコのナワトル語からスペイン語を経て); ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Siebold ex Koidz. (和名のヤマザクラから); タマボウキ *Asparagus tamaboki* Yatabe (和名のタマボウキから, [「メルボルン規約 (McNeill et al. 2012)」 第 60 条実例 34])。]

形容語が形容詞である場合と異なり、名詞の形容語は属名の性にしたがって形が変化することはない。

このことは明らかにラテン語ではない言語に由来する形容語の場合には問題とはならない (無変化の名詞として扱われるからである) が、ラテン語に由来する形容語で特に語尾が第一第二変化形容詞の語尾と同じ *-us*, *-a*, *-um* や、第三変化形容詞の語尾と同じ形で終わるもの場合、注意が必要である。名詞ならば属名の性が変わっても形容語は変化しないが、形容詞ならば属名の性に一致させて語尾を変化させなければならないからである。

「メルボルン規約」第 23.5 条は、これについて述べた条文である。名詞の形容語を誤って形容詞として変化させた場合、修正されるべき誤りとして扱われる。

第 23 条実例 6 は形容語が名詞である学名をいくつか挙げてある。そのうちのひとつにエゾミソハギ *Lythrum salicaria* L. がある。属名 *Lythrum* は中性名詞なので、もし形容語 *salicaria* (ヤナギ *Salix* のような) が形容詞であるならば *L. salicarium* としなければならないが、これはリンネ以前に用いられていた植物名 *Salicaria* を形容語として用いたものであり、名詞である。そのため属名の性によらず *salicaria* は変化しない。もう一つの例、コショウボク *Schinus molle* L. では、形容語 *molle* が第三変化形容詞 *mollis*, *-e* (柔らかい) を思わせ、男性名詞 *Schinus* に一致させて *S. mollis* としたくなる場所である。ところがこれもリンネ以前に用いられていた植物名 *Molle* で名詞である。ラテン語の *mollis* とは関係なく、ケチュア語に由来するという。したがってこれも属名の性が変わっても語尾を変化させず、*molle* のままである。これらを区別するためには原発表に引用されている植物名や学名を十分に検討する必要がある。

植物学ラテン語では、器官を示す名詞の語尾を形容詞のように変化させて形容詞として使用されることが多く、また、その男性形、女性形、中性形をそれぞれ名詞としても使用することができるため、形容語が名詞であるか形容詞であるか見ただけではわからないものが多いのである。たとえば「～の果実の」を意味する形容詞の語尾 *-carpus*, *a*, *um* は男性名詞 *carpus*



(carpos) の語尾を第一第二変化形容詞のように変化させ、形容詞として用いてある例である。そしてそれぞれの形を、異なる性をもった名詞として属名にも用いることができる（第 62 条実例 3）。

古い文献では形容語が名詞である場合には形容語が大文字で書き始められているため、判断は比較的容易である。この書き分けの伝統は長く続き、「セントルイス規約」（Greuter et al. 2000）までは勧告 60F に「60F.1. 種および種内分類群のすべての形容語は小文字で書き始められるべきである。しかし、形容語が人名（実在であれ伝説上であれ）、地方語名（または非ラテン語の名）または以前は属名であった名前に直接由来した場合は著者が大文字で書き始めたいならばそうしてもよい。」とあり、両者を区別して表示することが認められていた。しかし、この勧告は「ウィーン規約」（McNeill et al. 2006）で「60F.1. 種および種内分類群のすべての形容語は小文字で書き始められるべきである。」と改められて現在に至っている。このような形容語の品詞をめぐる混乱を避けるためにも、新形容語を提案する際には語源だけでなく品詞についても言及することが望ましい。

第 23.5 条は *-cola*（～に住むもの）で終わる形容語が名詞であることをはっきりと述べている。したがって、*arenicola*（砂地に生える）、*calcicola*（石灰岩に生える）、*lichenicola*（地衣上に生える）、*monticola*（山に生える）、*saxicola*（岩に生える）などの形容語は属名の性によって変化することはなく、*-cola* のままである。形容詞のように *-colus*, *-colum* と変化させている場合は修正されるべき誤りとして扱われる。

Greuter, W. et al. (eds.) 2000. International Code of Botanical Nomenclature (Saint Louis Code). Koeltz Scientific Books, Königstein.

McNeill, J. et al. (eds.) 2006. International Code of Botanical Nomenclature (Vienna Code). A.R.G. Gantner Verlag KG, Ruggell.

McNeill, J. et al. (eds.) 2012. International Code of Nomenclature for algae, fungi, and plants (Melbourne Code). Koeltz Scientific Books, Königstein.

## 植物研究会・同好会紹介

### 「水草研究会」

志賀 隆（水草研究会幹事）

「水草研究会」は 1979 年に原田市太郎博士と大滝末男氏の呼びかけにより、「水草同好会」として設立し、翌 1980 年に現在の会の名称に変わりました。発足当時の会員数は 101 人でしたが、現在は約 350 人で、専門の研究者だけでなく、在野の植物研究家や愛好家、環境調査従事者、教員や学生など、幅広い人たちが参加しています。本会は水草に関する研究および知識の普及と会員相互の親睦をはかることを目的とする研究会で、会



第 32 回全国集会（大阪大会）の集合写真（2010 年）

誌である『水草研究会誌』（ISSN 1348-4761）を年 3 号発行し、毎年全国集会を開いています。

会誌には水草（湿地や水辺の植物も含む）についての学術論文だけではなく、調査報告、水草の情報・資料など幅広い内容が掲載されています。水草好きの会員のだれもが興味を持って読むことができ、そして投稿できるような会誌づくりが創刊当初から続いています。この水草研究会誌も2013年11月、34年かけて100号の節目を迎えました。

毎年夏に開催される全国集会は今年で36回目を迎えます。全国集会は1日目に総会・研究発表会と懇親会、2日目はエクスカージョンを行うのが通例となっています。エクスカージョンでは開催地周辺の一級の水辺（年によっては一級の外来水草生育地）を巡ります。会員たちはフィールドに降り立つと、眼前に広がる水草天国に狂喜乱舞して、観察や採集に夢中になります。これは何だろうと参加者で首をひねり、勉強し合う絶好の機会でもあります。この魅力的なフィールドを巡るエクスカージョンを楽しみに全国集會に参加する会員も少なくありません。

少し暗い話になってしまいますが、現在の日本の水草を取り巻く状況は非常に厳しいものがあります。開発や水質悪化にともない、多くの水辺が失われ、かつて普通種だった多くの水草は絶滅危惧種になってしまいました。また、外来水草の分布拡大と旺盛な繁茂は、水辺環境自体を変質させ、大きな社会問題にもなっています。このような問題を職業研究者だけで解決することは難しいのが現状です。水草を愛する様々な分野の人々が集う水草研究会が果たす役割はこれから益々重要になってくると考えています。

最後に告知です。水草研究会の今年の全国集會（8月23日～24日）は島根県で開催され、エクスカージョンでは宍道湖とその周辺のため池での水草の生育状況を観察する予定です。このニュースレターが届くころには、発表の申し込みの締め切り日は過ぎてしまっていますが、参加申し込みはまだ間に合います。この紹介文を読んで水草研究会に興味をもたれた方は、是非本會に入会して、全国集會にご参加下さい。一緒に水草談義に花を咲かせ、川や沼にはまり、水草と戯れましょう！

#### ● Web サイト

水草研究会 Water Plant Society, Japan

<http://www.research.kobe-u.ac.jp/sci-kadono/mizuken.html>

#### ● 入会方法

年会費（一般4,000円、学生2,000円）を以下の郵便振替口座に送金してください。

口座番号 01170-3-13829

名義 水草研究会

#### ● 事務局

入会申込み、問い合わせ、会誌バックナンバー購入などは以下の事務局宛にご連絡下さい。

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学理学部生物学教室 角野研内 水草研究会

TEL/FAX : 078-803-5719

E-mail : [kadono@kobe-u.ac.jp](mailto:kadono@kobe-u.ac.jp)



昨年（2013年）のエクスカージョンの様子（栃木県高根沢町）。参加者はいったん野に放たれると、バスの出発時刻を過ぎてもなかなか帰って来ず、主催者を困らせます。









